河東節八段集　第一

河上徹太郎全集

第一巻

勁草書房刊

河上徹太郎全集　第一巻

昭和四十四年五月三十一日第一刷発行

著者　河上徹太郎
発行者　井村寿二
印刷者　白井倉之助
印刷所　精興社
製本所　牧製本
発行所　勁草書房
東京都千代田区神田駿河台二ノ三
電話東京(二九四)六一二一
振替東京　一七五二五三

© T. Kawakami Printed in Japan

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

0390—831110—1836

河上徹太郎全集　第一卷

編纂委員

石川　淳

井伏鱒二

小林秀雄

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

自然と純粋

自然人と純粋人……13
純粋言語考……19
ドストエフスキーとジッド……24
心理主義についての一私見……32
古典性について……35
羽左衛門の死と變貌についての對話……37
小林秀雄「オフエリヤ遺文」……45
三好達治「測量船」……49
横光利一「機械」……52

思想の秋

詩と現代生活について(一)……57
詩と現代生活について(二)……64
思想の實現について……67
リアリズム文學について……70

個性と流派……74
現代文學の一性格について……76
批評無能論に關して……80
リベラリズムについて……83
批評の危機について……86
精神的危機について……90
理智と小説について……91
純粋文學の辯……98
「花花」……103
「おふえりや遺文」……108
ボオドレエルの「覺書」について……110
作家の倫理と作品の論理……114
心理の敗北（「惡靈」のスタヴローギンについて）……119
バルザック的方法について……123
アンドレ・ジイドの評論について(一)……125
アンドレ・ジイドの評論について(二)……127

現實再建

現代藝術の氾濫……131
轉向作家と思想の問題……135
藝術に於ける傳統について……138
批評の自律性について……144
感受性について……150
詩歌と道德……156
「椿姫」――映畫と小說……160

事實の世紀

二十世紀精神の悲劇……167
事實の世紀……173
現代の頽廢について……178
ロマン主義文學の文壇的意義……182
評壇は沈滯してゐるか……187
日本文學の國際性……190
批評の近代性に關するノート……193

戰後の虚實

ジャーナリズムと國民の心……205
第二の青春……209
終戰の思想……211
火野葦平君への公開狀……216
今日の思想と教育……220
一九四六年……224
家出したノラの場合……228
飢ゑと不信について……230
二十世紀文明について……235
ヴェルレーヌの愛國詩……238

近代文學論

實存の文學……253
死の文學……259
良識と幸福……264
現代人の可能性……269

現代の精神像

二つの精神像……289
ジイドとの四半世紀……292
現代の孤獨……298

異端と正統

「神々」との対決……309
異教徒と神の問題……318
日本の異端と正統……326
ウズベック・上海・東京……330
中村光夫の近著二つ……338
小林秀雄への手紙……343
菊池寛と日本の文壇……349
石川淳に期待する……353
人間のいない政治……355
批評の悦び……361
文壇批評の現状……365
現代史についての一疑問……369

戦後の文学について……371
作家の日記……375
再び「文学の芸能化」について……380
作家気質の今昔……384
批評・マスコミ・文芸誌……388
小説に於ける詩ということ……393
純文学・文壇の必要について……398
現代文学と文体……402
西欧的な考え方の運命……412
誠実……414

批評の自由

文學の自由といふこと……421
批評精神といふこと……424
素人批評の論理學……429
現代文學の系譜……434
誠實の文學と實生活……438
私小說の變質……446

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

宗教と文學……449
日本のクリスチャン……454
文學を志す人々へ……462
岡倉天心と日本の覺醒……466
異邦人論爭……474
キリスト教文化の浸透……477

文学三昧

わが硬文学論
文学の実体喪失……485
小説不信論者の弁……495
吉田松陰……502
跋……小林秀雄……511
解説……江藤淳……513
解題……大平和登……519

自然と純粋

自然人と純粋人

「カラマゾフの兄弟」で、最初にアリョーシャが登場するに際して、ドストイエフスキーは次のやうな説明を附けてゐる。「事によつたら讀者の或者はこんな事を考へるかも知れない。この青年は病的な、有頂天になる程感じ易い、發育の貧弱な生れつきで、蒼白い顏してひよろひよろに痩せた空想家であると。がそれ所がアリョーシャは當時體格のしつかりした、頰の薔薇色をした、健康に燃える明るい眼差をした廿歳の青年であつた。……私には、アリョーシャが誰よりも一番正しい意味の現實家ではないかと思はれる。現實家は決して奇蹟に依つて惑亂させられるものでない。彼に於ては信仰が奇蹟から生れるのではなくて、信仰から奇蹟が生ずる。故にそれを極く自然な、然し只今迄知られないでゐた事實として許容するのである。又若し彼が不信者であるならば常に自分は奇蹟を信じない力を持つてゐると思ふが、一旦奇蹟が否定すべからざる事實となつて現れたら、彼は奇蹟を許容しないよりも、寧ろ自分の感覺を信じまいとする。」云々。

この一節は「カラマゾフ」を理解するためには忘れることの出來ないものだと思ふ。ドストイエフスキーは卷頭でアリョーシャがこの作の主人公であることを宣言し、しかも全卷を通讀した讀者の中でアリョーシャに對して不滿を感じる人のあることを恐れて數言を費して辯解してゐる。それから本文にはいつて暫くするとここに引いた前置だ。つまりこの作によつてはアリョーシャは完全に表現出來てゐないし、又作者もそれを豫め覺悟してゐたのだ。我々はカラマゾフの續篇として眞にアリョーシャが活躍する大小說をば、作者が覺書しか殘さないで死んでしまつたことを殘念に思はねばならないのだが、それはとにかくとして、「カラマゾフ」全卷を背景としてこの一節の言葉を考へて見るに、これを主題的概念として私の頭の中に幾多の傍系的想念の浮ぶのを覺えるのである。

先づ「アリョーシャが誰よりも一番現實家ではないか、」といふ「誰よりも」の中には普通に考へて恐らく長兄ミーチャが最上の候補者として算へられてゐるのであらう。それは、小說家としての手法の上ではバルザックの直系にあたるドストイエフスキーの筆觸に接するとき、素朴な讀者の誰しもが正當に感じる所である。否一歩進めていへば、生來の散文家で、政治狂で、自然神教徒である迄に正教徒であるドストイエフスキーには、全くの所現實家しか書けないといつてもいい。この點シェストフの名言によれば先づ「虛無よりの創造」といふ創作態度を廿歳代で獲得したチエホフと較べて、實にぎごちない點である。チエホフはこの地上を見るときに、恰も無限の距離から來る天上の數々の星の光線が地上の一點に於て平行線をなす如く、各人物が盡く絕對値を帶びて並立した。かくて虛無家でも

懷疑派でも、意識過多症患者でも、小兒でも犬でも、盡く近代的性格齟齬の暈影を透して、窮極の單純性を帶びて大地に直立した。これに較べてドストイエフスキーにはかかる心的作業はなく、彼は生の現實家を描いた。つまりこの大地の兒は自分の立つてゐる地點から、地上を遠近法的に見るより仕方がなかつた。故に彼は、己が小說の構成が要求する儘に、場面をロケーションし、その登場人物には利害關係による選擇が行はれる。彼の作には、當時の自然主義作家から狂人の肩書を附せられる迄に、燦然たる現實家が輩出する所以だ。

それ故、ドストイエフスキーの作品程容易に且つ無難に、ドイツ觀念論その他の哲學が纏綿するものはない。それは諸君がメレジユコフスキー、シェストフ、ツワイクその他何でも開くがいい。そして或は神と惡魔の對立を、或は生と死の、或は個人と社會の對立を研究するがいい。そしてドストイエフスキーは恐らくこの問題に於てニイチエよりも、福音書よりも又あらゆる社會科學書よりも、諸君を落膽せしめないであらう。然し依然として殘る私の疑問は、ドストイエフスキーが提出した幾多の生の現實家達が無限に織り成す劇も、それが可能的な人間の場合としては、聖書より、或はファウストより、或はモリエールすらより、新しく解決してゐるものが幾許あるかといふことである。換言すれば、小說家が抽象人の型を頭の中で組合せて作つた無限に多數の多元一次方程式は、然し決して無限に複雜な方程式ではない。生の現實家は宇野浩二の小說にも、「アサヒグラフ」にも映畫にも、如何にも美事に描かれてある。それらとドストイエフスキーの人物との差は單にこれら批評家が指摘する哲學上の概念だけであらうか。アリヨーシヤがミーチヤに較べて斯の如き辯解的前置が必要なのは、只概念が風格の上に乘移り惡かつた爲だらうか。一體ミーチヤよりアリヨーシヤがより現實家なのは、單に神と惡魔その他の概念的倫理價値の對立からだらうか。ここに從來のあらゆる批評家が見逃した一事がある。

藝術の發達史に於て、敍事詩が抒情詩に先立つたといふことは偶然ではない。人類が感動を感じたときに、漠然と感じた心情よりも、感ぜしめた對象物に明確な客觀性を認めてこれを歌つたことは當然だといはねばならない。然しやがて敍事詩に代つて抒情詩が起つて來たといふことは、もはや感動の物と心との對立ではない。何故なら、一旦敍事詩が發生した以上、物は既に物理的實在ではなくて、美の理念なのだから、例へば月を詠ずるに月から受ける情緒を以てこれに換へても何も新しいものはないので、卽ち情緒といふ心も亦月といふ物の一屬性に外ならないのである。だから藝術發達の第二段階としての抒情詩とは、ヴェルレーヌとヴァレリイを兩極とする一磁場、卽ち物心を對象として歌つたのではなく、かかる歌を歌つたものでなければならない。以上は最も安直な純粹詩論であるが、ここに於て、私は藝術を自然藝術と純粹藝術に分類して前揭の敍事抒情の假の名目を廢するとき、藝術家が書くといふことに見出されるこの區別をその儘實在の人が行動するといふ世界にあてはめると、自然人と純粹人といふ區別が得られる。

ここで再び前の例に立戻ると、ミーチヤもアリヨーシヤも共

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com